

2026年5月31日

説教題『あなたはわたしの愛する者』申命記33章12節b

主任牧師 加藤 誠

「主に愛される者はその傍らに安んじて住み／終日、神に身を寄せて／その御守りのもとに住まう」(申命記33章12節b)

先週のペンテコステで使徒言行録を読み終わりましたので、これからしばらく「信仰って何？」という問いをもって聖書に聴いていきたいと思います。4月の定期総会で私たちは一人の方の信仰告白を受けました。施設入所中で礼拝に参加できない。認知的な課題をもっておられる。しかし、その方の「うなずき」を信仰告白として受け入れ、その方と大井バプテスト教会を共に形づくる決断を総会としてしたのです。ただその時に私たちは一つの問いをいただきました。「イエス・キリストを救い主として信じる信仰とはどういう信仰なのだろうか？」という問いです。日本基督教団の教会では洗礼志願者は「使徒信条」を学びます。そして洗礼に際し「父なる神を信じますか？」「子なる神を信じますか？」「聖霊なる神を信じますか？」と尋ねられ、「はい、信じます」と応えて洗礼を認められます。一方でバプテスト教会は「わたしにとってイエス・キリストはどのような方であるのか」をその人自身の言葉で言い表すことを大切にします。なぜならバプテスマはイエス・キリストと共に歩み始めるスタートであり、わたしにとってイエス・キリストの救いとはどういうものを、その人が一生かけて考え、言葉にし続けていく。その時々「わかっただけのイエスさまを告白していく」ことが大切だから。その告白は決して完全とはいえないし、主イエスと一緒に歩む中で変えられていくことでしょう。が、それこそが生きた信仰告白だと思いますし、それゆえに私たちは信仰を人任せにしないで、自分で聖書を開き、聖書に聴き続けていく姿勢を大切にしたいのです。

さて、その信仰を考える一回目。「信仰とは神さまの呼びかけを聞くことに始まる。『あなたはわたしの愛する者』という神さまの声を聞くことに始まる」と表現してみたいと思います。パウロもこう語っています。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」と（ローマ10・17）。

聖書には、多くの人が神の語りかけを「聴いて／聴いてしまっ」信仰の歩みを始めています。例えばモーセ。彼はヘブライ人としての自分をどう生きてよいか分からなくなり、エジプトから逃げてしまった男です。でもそのモーセを捉えて神が語りかけます。しかしモーセは意味が分からない。「あなたはどなたですか？」「わたしは有って有る者」。ある人の訳では「わたしはわたしだよ」と応える神。その神が命じるのです。「エジプトのファラオのもとからイスラエルの民を救い出せ」と。「そんなこと出来るわけがないじゃないですか！」と反発するモーセを神さまは力づくで首根っこをつかむようにして一緒に歩みに連れ出していく。相当に強引です。しかし、

その不思議な神さまと一緒に歩むことを通して、モーセは「神が神であり、モーセをモーセとして生かしてくださる神の力と恵み」を体験していくのです。神はモーセのことをすべてご存知ですが、モーセはその神がどんな方か、全部わかって信仰の歩みを始めたわけではない。むしろほとんどわからないけれど、荒れ野を彷徨うモーセを見出し、「わたしは有って有るもの。あなたをあなたとしてあらしめる神だ」という、その不思議な言葉に捕まえられて、その神と共に歩む信仰をスタートさせたのでした。

また新約聖書では、ペトロは、ある日いきなり主イエスから声をかけられます。「わたしに従ってきなさい。あなたを人間を取る漁師にしよう」と。なんと強引な勧誘でしょうか。ペトロは主イエスのことをほとんど知りません。しかし、自分のことをすべてお見通しで、この自分を自分たらしめる不思議な力を主イエスのまなざしと言葉に捉えられてしまって、すべてを後ろにおいて、ペトロはこの方に従う歩みを始めたのでした。そう考えると信仰とは実に冒険です。自分に語りかける声を信頼して、何の保証もなく新しい一歩を踏み出していくのですから。

信仰には「自力の信仰」と「他力の信仰」があります。自分から神に近づいていく修行を大切にするのが「自力の信仰」。それに対して、神の方から近づいてきてくださり、わたしを探し出し、とらえ、一緒に行こうと声をかけてくださる。その方の恵みをありがたく受け取って歩み始めるのが「他力の信仰」。イエス・キリストの信仰は「他力の信仰」です。「神を愛し、自分を愛するように隣人を愛しなさい」という戒めを実践することで、神に近づき、神に喜ばれる歩みをしていこう！…というのは「自力の信仰」。自分には愛がない。貧しい愛しかない。自分の非力さを自覚しながらも、そんな非力な自分を大切に覚えて、神のほうから近づいてくださる、その愛をありがたく受け取ってわたしに出来る形で応えていこう！…というのが「他力の信仰」。

「主に愛されている者はその傍らに安んじて住み／終日、神に身を寄せて、その御守りのもとに住まう」（申命記 33・12b）。

この御言葉にあるように、「主に愛されている者」としての自分、「十字架の主に覚えられ、祈られている者」としての自分を知らされる。それが私たちの信仰の始まりです。先日ある方をお見舞いに伺ったとき、この申命記の聖句を読んで一緒に祈りを合わせました。その方はご高齢でベッドから起き上がることもなかなか難しくなっておりますが、そのベッドの上で「あなたはわたしの愛する者」と主イエスが語り掛けてくださっている恵みを覚えました。その場所は生きるのに決して楽な場所ではありません。むしろ毎日いろいろなつらさと葛藤を覚える場所。しかし、その場所にイエス・キリストが共に歩み、「あなたはわたしの愛する者。わたしがあなたの命を共に生きる！困難も試練も、つらさも悲しみも一緒に受けて生きる！たとえそこが地獄なら、その地獄をわたしも共に生きる！」と言い抜いてくださっている。その主イエスの語りかけに信頼し、その語りかけの中を歩むとき、私たちは「その方の傍らに安んじて住む幸い」を体験していくのです。